研修名　発達支援リーダー研修　第１回　【基礎編】
平成２７年８月２５日（火）１５：００～１７：３０

講　演　「乳幼児期の発達と発達障害の理解　～乳幼児期の発達理解～」

講　　師　清水　里美　氏

１　乳幼児期の発達

１）発達とは
発達とは人間の心身や行動が量的・質的に変化していく過程のことである。
発達は１つ前の段階がしっかり出来ていないと次の段階へはいけない。

・発達には順序性と方向性がある。頭から足、中心から末端。
・遺伝と環境の相互作用によって、発達が調整される。
・発達は成熟と学習からなる。

①発達心理学の教科書から
その子の認知発達・興味関心をアセスメントすることで、その子を理解することができる。様々な視点（運動機能・知覚機能・認知機能・言語機能・社会性の発達）をもってアセスメントする。発達には個人差がある。

２）発達検査と発達の問題
発達検査では、子どもが今どの段階なのか評価する。

３）「発達段階」「発達課題」
①エリクソンによる発達課題
第一段階：乳児期　基本的信頼　愛着関係
第二段階：幼児期前期　自律性　身辺自立
第三段階：幼児期後期　自主性　集団参加

②ピアジェの発達理論：認知発達
感覚運動的段階　（０～２歳頃）
表象的思考段階　（２歳頃～　）
前操作的段階　　象徴的思考段階（前概念的思考段階）　（２歳頃～４歳頃）
直感的思考段階（４歳頃～７歳頃）

４）発達段階ごとの乳幼児期の様子
①誕生～１歳半頃　　基本的信頼感　愛着関係／感覚運動的段階
反射から随意運動への発達。記憶する力を獲得することによりものが急になく

ならないことが分かる。表象機能の発達によりふり遊びや見立て遊びができるようになる。指差しが出てくる。三項関係の成立によりもののやりとりが出来るようになる。自分から大人への働きかけにより模倣で獲得した動作が使えるようになる。関わってくれる人が意味付けしてくれるこのベースが大切。

②１歳半頃～４歳頃　　自律性　身辺自立／象徴的思考段階
自己主張する。２歳頃になると経験したことを伝えられる。物事や対象に関心を示し「どうしたの？」「だれの？」と尋ねる。羞恥心・罪悪感・自尊心が芽生える。

③４歳頃～就学前　　自主性　集団参加／直感的思考段階
遊びの中で相手の気持ちに気付き、我慢できるようになる。

・ｋ式発達検査の項目から
姿勢・運動領域　　認知・適応領域　　言語・社会領域

２　　映像で観る子どもの発達

・記憶　　ものの永続性→記憶力の獲得→記憶力の安定（１歳半）
・愛着行動　　人見知り（６～８ヶ月）→後追い（８ヶ月）
・大人との関係　　こうしたいという気持ちと行動が一致（11 ヶ月）
・友だちとの関係　　並行遊び（６ヶ月）→友だちを意識（１歳半頃）
３歳頃になると我慢ができるようになる。大人が子どもの気持ちを理解することが大切である。
・言語の発達　　母音のみ。子音は出せない。（３ヶ月）→母音＋子音（８ヶ月）
11 ヶ月頃になると喃語が出始めるが意味はない。１歳半になると「まんま」などの意味のある言葉が出始める。３歳になると文法がしっかりし、否定形も使用できるようになる。疑問形も多くなる。子どもの気持ちを理解し助けてあげることで、言葉の広がりを助けてあげられる。

①乳幼児期における子どもの発達において、重視すべき課題
子どもの気持ちをくみ取り言語化するという基礎が人への信頼関係につながる。集団生活の中で社会性や人との関わり方を学んでいく。
②発達的な視点からの支援ポイント
本人が褒めて欲しい所を褒める。結果だけを褒めるのではなくそこに至るまでの過程の中で褒めることが大切。１日の中で何か１点でも良い所を見つける。

３　　感想

今回は基礎編ということでいろんな領域の発達について学びました。どの領域の発達においても大人との関わりや働きかけが大切であることを改めて感じることができました。今後の保育をすすめていくうえで頭においておきたいです。

（記録　舞鶴市立うみべのもり保育所　　川渕）